

いうものがあるのでしょうか。引揚船仲間では山形県出身の、当時、青森県の八甲田山の奥深い高原の開拓共同農場で働いていた男性と恋愛関係になり、駆け落ち同然で行ってしまいました。

その後はいろいろと家庭的なもつれもあって、離婚したり再婚したりの数奇な運命をたどり、晩年にはとうとう自ら命を絶ってしまいました。

それもこれもみんな、昭和二十年八月十五日を境として天から与えられた、見えない糸で引かれた運命の為せる業であるのでしょうか。

戦争というのは、人の運命を狂わせてしまうのです。私は、兄弟姉妹の十人の中で一番小さく弱々しい子であったのに、今日までいろいろな苦難に遭遇したのに、よくもまあ無事に過ごしてきたものと感無量なものがあります。

父も母も、兄も姉も、弟も妹も、みんな良い人だったと、今でも誇りに思っています。

今は、長兄と長姉と私の三人が存命しております。この三人が生きている限り、みんなの供養をしていき

ます。

開拓一家の生涯

福島県 矢部 勘治

矢部 京

渡満するまで

福島県岩瀬郡白方村の山間部にあつて、炭焼きと小作農を生業としていた矢部家の三男として、私は生まれた。八人兄弟の五番目という大家族で、貧乏生活の日々であつた。

一番上の兄は海軍を志願して早くから家を出ていたし、姉は東京に嫁ぎ、二番目の兄が両親と一緒に家の仕事をしていた。私も、小学校を終えるとすぐに、地主の家に雇われて住み込んで働いていた。

昭和十三（一九三八）年に、姉の夫である加藤芳雄が、煙草専売局須賀川工場から派遣されて、北支那の大同という所に、新しくできた煙草工場の経営にかか

わることになって、単身で大同に行った。既に支那事変が始まってどんどん拡大していて、世間は軍国主義時代に入りつつあった。

大同の煙草工場では人手が必要だったので、義兄は私に來ないかと誘いを掛けてきたので、私も二つ返事で喜び勇んで大同に向かった。煙草工場では、私を軍属として待遇してくれた。小学校卒業の学歴では採用できないので、私は旧制中学校卒業と学歴を偽って履歴書を出してもらった。旧制中学校卒業となっていたので、大勢の現地中国人の工員を指揮・監督する職務に就いたので、急に偉くなったような気持ちになっていた。

しかし、しばらくその仕事に励んでいたが、私は生来おとなしい性格で、人と争うこともあまり好きでなく大きな声を出すこともしなかったので、大勢の中国人を使って仕事をしていくという重大な責任を有する職務には適していなかった。そんなことからだんだんとその仕事が重荷になり、耐えられなくなつてついに半年で辞めて福島に戻った。

家は相変わらず貧乏で、朝から夜遅くまで炭焼き仕事や農作業に暮れていた。そのうちに家の仕事をしていた次兄は、ブラジル移民の募集に応じて、大志を抱いて新天地を求め、ブラジルに移住してしまった。

その次兄がブラジルに行く前後に、海軍に行っていた長兄が兵曹に進級して除隊し家に戻ってきたので、嫁さんをもらつて家の仕事を引き継ぐこととなった。

しかし、それも長続きせず、満州の開拓団に行きたいという話が起きてきた。両親、兄弟、親戚が寄り集まつて親族会議が開かれた。

その結果、家の仕事は弟の七郎が引き継ぐこととなり、長兄の家族を引き連れての満州行きが決まった。こうなると私も、この家にいられないこととなり、どうしようかと思索したが、決心して長兄と共に満州に行くこととした。

独身の私は身軽だったので、一行よりも一足先に渡満して、三江省富錦県筆架山の第九次福島県集団に入植して本部隊員となった。昭和十六年末のことであった。

集団内の整備ができた翌春に第四部落に落ち着き、今までと違った大陸的農業経営を組織的に開始した。

初めての農業経験であり、いろいろと分らないことも多く随分と苦勞を重ねた。やはり、農業をするとなると独身では生活も落ち着かず、一人よりは二人で開拓作業をする方が能率も上がるので、世話をする人がいて、妻、京を迎え新婚家庭を築いた。

新婚生活といっても、戦時下の開拓団での急造新家庭であり、めばしい家財道具などは何も整っていない。福島時代と同じく貧しい生活だったが、それでも福島とは大きく違い、土地が広くよく肥えている新天地であり、二人には希望に胸を膨らませての新生活であった。

筆架山開拓団は土地が肥沃で、福島とよく似た風土環境であったので、内地でもよい評判で人気があり、筆架山に入植したいという移住希望者が多かった。しかし、現実の開拓団では、開拓経営に失敗して財政的にも思わしくなく、入植者はみんな苦勞していた。農具や農業力の補助手段として使う家畜も少なく、満拓

公社からの資金の交付も不足がちで、団員の中から不満の声が高まっていた。また、そのような不安定な環境にあるために、開拓団員の士気も低下しており精神的にも動揺していて、更に満人や朝鮮人との折り合いも必ずしもよくなって、必然的に治安状態も悪化して、不安が高まっているのが実情であった。

私より一年ほど遅れて長兄一家が入植してきて、隣の第五部落に入った。第五部落は、筆架山集団でも一番奥の山の下にあって、何をすることも不便なところであり、そのうえに鳥獣による被害も多くて大変に難渋をしている部落であった。特に後から入植したために生活物資が極度に不足していて、日常の生活にも自由をするようになった。当座の生活資金にも事欠く有様であった。

それでも何とかして生活をしていたが、病人が出ても治療することができずに、死んでしまう人が多かった。兄の子供も、ここで十分な面倒もみられずに死んでしまった。

兄は、海軍の下士官であった経歴から部落長に推さ

れていたが、その責任の大きいことに苦しみ悩んでいた。また、兄嫁は「こんなところにきて！」と泣き言ばかりを言う毎日で、随分と後悔をしていたようだった。悪戦苦闘をしていたが、そのうちに第五部落の山間部にダムが建設されることとなり、更に別の山奥では炭鉱が発掘されて、佳木斯市から鉄道が敷設されることになり、その建設工事に働きに出て行き、少しではあったが日常生活にも落ち着きがみえてきた。生活は相変わらず苦しかったが、それでも前途に少しずつ明るい光が見えるようになり、ほっとしていた。

昭和十八年十月には長男の尊男が生まれて、一家に明るい笑い声が出てきたし、私もこの子のために、生活はつらくとも頑張らなければと、他人に負けずに働いていた。

戦局はいよいよ切迫してきたが、開拓団では戦争のことを考える余裕もないほど、農産物の増産が督促されていた。しかし、その努力にもかかわらず、農作業の成果はあまり挙げがらず、供出割当量が実情にそぐわず過重気味で、「お国のために！」とか「滅私奉公」

とかの掛け声を掛けられてもなかなか思うようにはいかなかった。兄も責任者の一人として苦勞をしていたが、こちらも作業に一生懸命で助けることもできなかった。

再度の召集

昭和二十年五月十日、春の作付け作業でそれこそ「猫の手も借りたい」というくらいに繁忙なときに、予想もしていなかった召集令状がきて、出征することになった。開拓団から二十人近い人が召集された。後に残す家族や農作業のことを心配しながら、暗い気持ちで出立した。

ここ三江省一带はソ連との国境に近いので、いざというときには、開拓団員の手で守るということで特別区に指定されており、自警要員である団員は召集をしないということが、軍との間で約束事になっていると聞いていたので、召集ということについては安心をしていたのに、前もって何の話もなく、それこそ「青天の霹靂」の如き召集令状であったので、内心は随分と不満であったが、表立って抗議するわけにはいかず、

泣きの涙で召集に応じた。

筆架山から遠く離れた東満国境の老黒山にあった歩兵中隊に入った。私たちが召集された後も、引き続きて次々と開拓団の男子は兵隊にとられてしまい、開拓団には老人と女子供だけとなった。満蒙開拓団の当初の使命とか、存在意義などはまったく無視されていた。関東軍も、ただ兵隊だけを集めて頭数をそろえればいいという考え方で、開拓団を保護するとか国境を守るとかという使命は、まったく忘れ去っていたのだろうか。ここから全満蒙開拓団の悲劇が生まれたのであろう。

残した家族の様子を知ると、開拓団から召集された私たちは身を切られるような切ない思いであり、お国のために一命を投げ出して軍務に服するなど、実際には思いもよらない気持ちであった。私たちは寄るとさわると、残してきた家族や団のことを話し合い不安になつていった。実際、開拓団では農耕作業もほとんどできずに挫折に近い状況であつたようだ。

老黒山の部隊の兵舎は地下壕で、屋根にも土が盛り

れていて完全なもぐら生活であつた。私は特攻班に選ばれた。選抜されたと言えば名誉の如くに聞こえるが、実際はいや応なしに指名されたのである。特攻班というのは、敵の戦車が攻めてきたら、爆雷を背負つて戦車の下に潜り込んで爆発させるか、または、夜間に敵の集団に向かって少人数ずつに分かれて、爆雷をもって殴り込み、奇襲攻撃をするのが任務の班である。必ず死ぬことになる運命を持っていて、しかもそれは新兵だけの組織で、甚だ心細い思いでいた。

そんなときに、長島伍長が班長になつた。長島伍長は私と同じ部落の出身で一緒に召集され、以前からよく知っている友達だつた。私より後輩であつたが階級は伍長だつた。軍隊では、伍長と二等兵の関係といえ、**「天と地」「月とすっぽん」**ほどの差があるのだが、長島伍長は以前と変わらずに、「矢部さん、矢部さん」と呼んでくれ、何くれと無く面倒をみてくれた。

中隊に残つた特攻班以外の一般初年兵は、内務に訓練に厳しい日課で鍛えられていた。給養も悪くて疲労

困はいの有り様であった。私たちの特攻班は、任務の性質上給養も割り合ひによく、昼食も重たい弁当で、それを持って山の中に入り、班長の指揮で訓練に従事していたが、訓練の方法はすべて班長の考え一つであった。

挺進奇襲の要領は、一応、申し訳程度に簡単に実施して、残りの大半の時間は山の斜面の日陰で昼寝をして過ごしていた。長島班長は、「どうせおれたちは真っ先に死ぬのだから、今のうちのはのんびりやろや」と言っていた。こんな状態なので、班員は皆、仲が良かった。

東満の山々では、春から夏にかけては全山花に埋まり、鳥は高く低くさえずり、草木は青々として、河から吹いてくる風は心地良く、のどかな風景であった。残してきた家族や開拓団のことは、無理に忘れてひとときの平和を楽しんで過ごしていた。

「特攻班は、ええなあ」と中隊の仲間にはうらやましがられた。しかし、毎日のように東満国境を超越して偵察に飛来するソ連軍の飛行機の轟々という金属音

を耳にするたびに、どうなるのかと気にはなっていた。

太平洋方面、支那方面の戦況がどうなっているのかは、兵隊には何も知らせてもらえないので分からなかった。もちろん新聞もラジオも無く、正しい情報は何一つ入ってはこなかった。ただ、兵隊の間で、ひそかに口伝えで知るうわさ話では、本当に信ずることもできないが、ソ連軍が攻めてくるのではないかという話が伝わっていた。そして、その話がまことしやかに言われる理由に、東満国境付近の部隊の移動を度々見受けたことである。しかし、はっきりした戦争の行方は皆目想像もつかなかった。

ソ連軍の侵攻と後退

八月九日の夜半から、銃砲爆の音が遠雷のように聞こえてきた。部隊本部からの命令を受けた班長は緊張していた。口伝えのうわさ話が、ついに本当になった。ソ連軍が国境を越えて侵攻してきたとのこと。いよいよソ連軍との戦争が始まったのだ。怖いとも、恐ろしいとも思わなかった。ただ、来るべきもの

が来たという落ち着いた気持ちだった。筆架山に残っている家族や開拓団がどうなるのかということが、ちらっと頭をよぎったが、すぐに消えてしまった。やはり興奮していたのだろう。

津波の如くに押し寄せるソ連軍を迎え撃って、天地を揺るがす激戦が展開されることを予期し、その激しい戦場で、私たちはソ連軍の戦車の下敷きになって華々しく散るのだ、という覚悟を新たにしていた。長島班長以下、班員はみんな同じ思いで緊張していた。

激しい撃ち合いが何か所かで起きていることは判断できるのだが、我が班の前面にはソ連兵は現れてこなかった。遠くを見ると、のろのろと移動している部隊が見られたし、また、別の方向では雪崩のように後にながっている友軍陣地もあった。どのような戦況になっているのかはつきりとは分からないまま、時間だけが過ぎていった。

本隊が、半日も持たずに全滅したという連絡が入った。

厳しい軍規のもとに、号令一つで迅速・敏しょうに

動く精強な日本陸軍の姿はもう見られずに、満州国の内部に向かって続々と後退する関東軍の姿が情けなく、これが天皇陛下の軍隊なのかと信じられない状況になっていた。私たちが開拓団員として勇躍渡満して以来、事あるごとに聞かされていたのは、関東軍は精強無比な世界一強い軍隊で、いざというときには一般邦人を絶対を守るから大船に乗っていてよいということだった。開拓団の人々も信仰に近いような気持ちを持って、絶対の信頼を寄せていた関東軍だったのに、今はソ連軍の侵攻にひとたまりも無く、後退する様子を目の当たりに見て、情けない思いであった。

第一線のこの有り様を見て、残してきた家族や筆架山開拓団の人々が、一体どうなるのだろうかと一抹の不安が、また頭をよぎった。考え出したら、もういても立ってもおられない衝動にかられたが、現実はどうにも致し方なかった。

長島班長は冷静だった。そして状況判断をすると、直ちに迅速な行動に移った。一個分隊のまとまりのよい組織だったので、分隊員は班長の指示ですぐに行動

をした。本隊も全滅したので、ここで戦うことは無いと、混乱しながら南下を続けている部隊の間をくぐり抜けながら走り抜けた。途中では、南下する軍用列車にも潜り込んだ。兵隊を満載して北上する軍用列車とも擦れ違ったが、あの人たちは結果的にはシベリア送りの運命になったことだろう。無我夢中の行動だった。

やっと牡丹江近くに着いたころ、関東軍は二倍以上の勢力を持ったソ連軍の機械化部隊に圧倒されて、北満から鮮満国境近くまで後退していた。そのうちに、どこからともなく、「日本が無条件降伏した」ということが聞こえてきた。関東軍は兵力だけがあったが、大部分は寄せ集めの兵隊で、武器・弾薬はほとんど満足に満たされていないので、敗戦は当たり前前のごとであった。ソ連軍によって武装解除をされることも分かったので、長島班長は、「ここで部隊を解散する」と命令した。

私はみんなと相談して、家族を助けるために牡丹江から佳木斯に向かうこととした。奥地から逃れて来る

避難民の流れに逆らって進む貨物列車があったが、それに乗ることができずに、どうしたものかと思案していたときに、偶然にも避難民の群れの中に混じって、一緒に南下している知っている顔を見付けた。その人は、孟といった。

孟との再会、そして帰国

彼は、筆架山時代によく知っていた孟という名の現住人で、向こうから声を掛けてきた。「矢部さん！矢部さんではないか。何をぐずぐずしているのか！今ごろはもう筆架山には日本人はだれ一人としておらんよ。おれと一緒に来い、おれに任せろ」と言った。彼は、大連市内で妻に食堂をやらせていたので、そこに行くこととした。

私はその食堂で、取りあえずこれからの行動を決めるまで使ってもらうこととなり、今まで着ていた軍服を脱いで、支那服に着替えて日本人と分らないように、言葉は一切口に出さないことを約束した。私は黙って店の裏方について、食器を洗ったり掃除をしたり雑用をすることとなった。私は、他人に使われるこ

とには慣れていたので、平気で素直に働いた。孟夫婦からも親切にされていた。

大連市内には多くの日本人をはじめ、中国人、朝鮮人、白系ロシア人など多人種の難民であふれていた。その中でも日本人は、ソ連兵や他の人種の人たちからことごとく迫害を受けながら、我慢強く生活をしていった。

病人やけが人の治療や、毎日の食生活など大変に困っていたようだったが、私の力ではどうしようもなかった。私は孟夫婦の保護のもとに、日常の生活にも不自由、不安もなく冬を越すことができた。しかし、家族の行方は皆目分らないので、気持ちのうえからは日夜悩みながら明け暮れていた。行方が知れないので捜しに行くこともできない。筆架山周辺から避難してきた人にも会えない。どうしようもない焦慮感でいっぱいであった。

昭和二十一年の秋に、大連地区からの引揚げが開始された。孟夫婦からも、早く日本に帰って故郷で家族の引き揚げて来るのを待った方がよいという励ましを

もらい、今までの賃金だといって過分な金も与えてくれた。感謝の気持ちでいっぱいであった。多くの日本人引揚者と一緒に日本に帰った。

私は兵隊に行つて、特攻班として華々しくソ連軍の戦車と刺し違える運命にあつたのが、運良くそんな状態にならずに、避難行を続けて大連にきて孟に拾われ、無事に帰国することとなり幸運であつた。

いろいろと人並み以上の苦勞はしたが、五体満足で帰国できることは本当に有り難いことであつた。故郷に帰つたら妻は一足先に引き揚げ無事であつた。だが、長男の尊男は、かわいそうに避難行の途中、新京ではしかにかかつて死んでしまったとのことだつた。悔やんでも悔やんでも、悔やみきれるものではないが、致し方ないことである。

他人の不幸に比べれば私などは幸いだつた方で、神仏に感謝しなければならぬ。しかし、妻たち筆架山開拓団に残つた人々は、私などよりも数倍も数十倍も苦勞をした。

昭和二十年五月に、二十人近い開拓団員と共に召集

されて筆架山を出ていってから後のことは、妻が記す。

妻、京の苦勞の思い出

私は、小学校を卒業してすぐに理髪師見習いとして働き、そのうち免許をとって理髪師として郡山市内で勤めていたが、父の話に従って満州の開拓団の花嫁として、筆架山の福島県集団にいる矢部勘治のもとに嫁いだ。農業はやった経験が無いので心の中では嫌だと思っていたが、父から強く言われたので反抗するわけにもゆかずに、致し方なく嫁いだ。

昭和十七年の十一月、金も持たずに矢部の家に着いた。着いてすぐに驚いたことは、家の中には何も無い。炊事用具さえも無いのであった。これが満州の開拓団生活かと覚悟を決めて新婚生活を始めた。気候温暖な福島から一転して、もう厳しい冬の様相になっている筆架山にきて、胸の内は悲しみでいっぱいであった。

早速に、周りの人のしていることを見習いながら、慣れない仕事に小さな体で一生懸命に働き辛抱強く努

力をした。

筆架山開拓集団の農地は、肥沃であったので作物はよくできて、何とか自給自足が可能であり、生活用品もだんだんと整って、最低の日常生活には事欠かなくなってきた。

満州新天地の生活のリズムにもようやく慣れてきた昭和十八年十月に、長男を出産した。尊男と名前を付けた。親子三人貧しいながらも幸福な毎日を過ごしていたが、戦争がだんだんと激しくなり、とうとう昭和二十年五月には、夫にも召集令状がきて兵隊に行ってしまう、残された私たち親子は、どうしてよいのかなすすべもない毎日を過ごすようになった。多くの出征兵士を出した部落の主婦たちも同じ思いだった。

昭和二十年八月十三日、運命の日を迎えた。突然の避難命令で世の中が変わり、私たちの生活も百八十度変わった。

近所の人たちは、家財荷物を馬車に山のように積んで大騒ぎをしていたが、私は、ソ連軍が侵攻してくるようではもうどうにもならないとあきらめの境地とな

り、多くもない家財道具類を、今までお世話になった満人たちに片っ端から惜し気もなく分け与えたが、彼らもその気持ちを察してくれたのか、「餓別」といって金を置いていった。この金は、後日の避難行において大いに助かったものだった。

食料品や衣類を馬車に積み込み、揚ぼという満人の青年の協力を受けて出発した。途中で多数の馬車がわれ先に走るので、雨あがりの道はぬかるんでしまい、わたちの跡がたくさんできて、そこに馬車の車が落ち込み転倒馬車が続出し、渋滞を招き避難民の行列ができた。

そのときに、北満の奥地から避難してきたらしい女性のグループが、私たちの集団に寄ってきて、「あなたたちのこの騒ぎは何ですか。すぐそこにソ連兵が追ってきているというのに。のんきなことは、よしなさい！」と強い言葉で言うなり、私たちの荷物を馬車からばいばい投げ捨てて、空いた馬車に彼女らが次々と乗り移って、馬の尻に一鞭当てるや、さっさと乗って行ってしまった。彼女たちは軽装で、帯の間に短刀

のようなものを差し込んでいた。

決死の面相に、私たちは圧倒されて啞然としている一瞬の出来事で、何の対応もできず言葉もかけられず、もちろん抵抗もできなかった。

私の馬車を引いていた揚青年は、いつの間にか小石沢さんのところの子供を背負わされていた。私は何も持たずに尊男を背負って歩いていたら、後ろの方から、「矢部さん、矢部さん」と叫ぶ声があるので立ち止まると、後ろから平尾さんが走ってきて、私の名札の付いたリュックサックを持っていて、「これ、矢部さんの物だべ！」と言って渡してくれた。私は平尾さんに礼を言って受け取ったが、このリュックサックには食料品や衣類や金も入っていたので後々まで大変に助かった。このリュックサックのことはすっかり忘れていた。これが私の手元に戻らなかったら、私の運命も大きく変わっていたかもしれない、思い出しては冷や汗が流れる。あいにくと雨が降り出したので、歩くことに難渋した。

その夜は、満人部落に泊めてもらった。親切にして

くれたので品物を渡して礼をした。翌朝その部落を出発したが、佳木斯の市街が見えてくるころになると疲れが出てきて、足が重く思うように進めなくなった。

佳木斯市街は、黒煙に包まれていてソ連軍の飛行機の爆音が響き、あちらこちらで爆発音が聞こえていた。

佳木斯の街に入る前に、馬車の上で吉田さんのお産があった。産婆さんに、「矢部さん、はさみ、持っていないか？」と言われたが、そんな物持っているはずがなかった。馬車の上でお産をした吉田さんは、元気で引き揚げられたという話を後になって聞き、びっくりすると共に、よかったよかったと安どの胸をなで下ろしたものだだった。

「皆さん、早く、早く、最後の避難列車が待っているから急いで駅に行ってください！」と、乗馬の兵隊が大声で叫んでいた。みんなは、必死になって残っている力を振りしぼって駅に向かった。

市内は火の海であった。佳木斯駅前の広場で、部隊長から、「皆さんを軍隊が守り、ハルビンまで送り届けるので安心してください」という訓示があり、祖国

遙拝、君が代斉唱、そして万歳三唱をした。「さらば佳木斯よ、また来るまでは……」という歌を歌う人もいれば、何か演説している人もいた。

ソ連機の空襲の合間を縫って、混乱を繰り返しながらも全員乗車を終えた。

ようやく列車は発車したが、しばらく進むと後方で鉄橋が爆破された。もう少し遅ければ爆破に遭遇しているところで、危機一髪というところだった。追われるように列車は走っていたが、途中で脱線して、その衝撃で私は一時失神してしまった。周りの人々に介抱してもらっていたが、敵襲という騒ぎで気が付き意識を取り戻した。列車も止まってしまい、みんな一斉に線路に飛び降りて逃げた。一時はどうなるかと心配したが、私たち避難者には被害が無かったが、機関車が倒され、線路の一部が壊された。敵は、我が方の警備隊の応戦により退散したので、すぐに鉄道部隊が線路を修復した。私たちは、横転した機関車をそのままにして次の駅まで歩いた。別の機関車がきて再び出発したが、生きた心地がしなかった。再出発後、列車

はスピードを出さずにのろろ運転であった。乗っている者は、みんなもどかしくていら立っていた。やっと綏化に着き、飛行場の格納庫に収容された。

綏化、ハルビン、新京へ

私が日本の敗戦を知ったのは、この綏化の格納庫であった。とうとう日本は負けてしまった。私たちは何のためにこの満州にきたのだろうか、後悔の思いが胸にこみ上げてきた。しかし、どんなに考えても、現実はこの状態から抜け出せることは、叶わないことで、自分たちの力でこの逆境を乗り切らなければならなくなった。一緒にいた飛行場の部隊は、みんなシベリアに連れていかれた。

そのうちに、進駐してきたソ連兵や現地の中国人により、奪略、暴行などの迫害に遭うことになった。大変な苦勞をしながら約一カ月ここにおいて、ようやくハルビンに移った。しかしハルビンでも避難民があふれ、新しく避難してきた者の入り込む余地などはなく、更に新京に行くこととし、九月末に新京に到着した。それまでは、筆架山開拓団から逃れてきた人々

は、皆元気でそろっていて、お互いに喜び合っていたが、それもつかの間のことであった。

順天小学校に収容されたが、召集された人も部隊の解散などにより、逐次、家族を捜し求めてここ新京に集まってきた。私のすぐ上の兄とも、ここで奇跡的に再会し、お互いに喜び合った。

収容生活がだんだんと長引いてくると、栄養失調から病気になる人が次々と出てきた。特に、子供たちの中には、はしかが流行してきた。

新京まで、何の病気もけがもせずに避難してきた尊男も、とうとう感染してしまい、看病も十分にできなかった。あっけなく死んでしまった。満二歳の短い人生だった。

当時日本では有名だった漫画の『フクちゃん部隊』の主人公の「フクちゃん」が、大学の角帽をかぶって白い前垂に下駄履き姿だったが、尊男はそのフクちゃんにそっくりの顔形で、ちょこちょこ歩いていて、みんなの間でもかわいがられていた。死ぬまで使っていた前垂を、尊男の唯一の形見として持ち帰ったが、

その前垂のポケットに、筆架山の「甘ホウズキの種」が入っていた。それは小さな黄白色の丸い実で、中国では、「グウニヤン」と言っていた。実がたくさんなり、果物代わりに喜んで食べていた。尊男の思い出として引き揚げてきてからまいたところ、毎年実を付けたので、近所に配った。近所では、私が、「甘ホウズキの元祖」と言われている。これも尊男の供養かと大事にしている。

避難民も急が増えてきて、順天小学校の収容所はあふれてきて、市内のあちらこちらに移動する人が出てきた。私も陸軍の官舎に移った。毎日の食、べることのために働かなければならず、私は昔の技術を生かして新京市内の理髪店で働いていたが、病気にかかり厄介者扱いされて辞めさせられた。しかし病気が治って、また働いていた。

兄は、ソ連軍による「男狩り」を逃れるために、髪を伸ばし放題に伸ばして、病気のやせ老人のような姿になっていたので、働くことができなかった。

新京には、約一カ月いて更に南下し、十一月に奉天

にたどり着いた。

奉天での生活

十一月になると寒さは本格的に厳しくなってきた。奉天では青葉小学校に収容された。体を寄せ合ってお互いの体温で寒さを防いでいたが、実際には大して効果はなかった。夜具もなく、完全な暖房設備もなかった。食べる物も満足になく、何カ月も洗ったことのない不潔な体で、シラミが体全体に住みついている。だんだんに衰弱していった。しかし、そんなことにはお構いなく、ソ連兵による「女あさり」と、現地人の奪略、盗みはますます横行していた。もう、持ち物はほとんど無くなっていた。

恐れていた、「発疹チフス」がはやってきた。栄養失調で体力的に抵抗力のない老人、子供がばたばたと倒れ、毎日毎日死者が出たが、埋葬するにもその力がなく、また土が凍りついていて掘ることも不能で、そのまま広場の隅や空きプールに投げ入れていたが、すぐに満人が遺体を集まり、着ている物を全部脱がして持って行ってしまった。裸のまま放置された遺体に

は、狼や野犬が蝟集し、食い散らしていた。そのうちに野良猫までがそれに加わり、目を覆うようなその凄惨な有り様には身震いがした。

春になったらどうなるのだろうか、どうせ早いか遅いかの違いはあっても、みんな死ぬのだろうか。私はいつになるのだろうか……と、死刑囚が刑の執行を待っているような気持ちで毎日を過ごすようになった。そのころになると、望まれて中国人の嫁や養子に行く人も出てきた。これからの先行きに希望も無くなり、毎日の食べることに事欠くようになってくると、少しでも安定した生活をしたいという気持ちから決心した人がほとんどであった。

収容所での共同生活にも苦勞が多く、鉄西区方面の社宅や官舎に移る人も多くなり、青葉小学校の収容所にびっしりと詰め込まれていた避難民も、だんだんと少なくなりまばらになっていた。女は、髪を切つて丸坊主となり、垢で汚れて真っ黒い顔となつていて、まるで動物のような姿であった。

町外れの空屋などを壊して、まきを作つて売りに歩

いたりして、なんとか生きて春を迎えたいと必死であった。

やっと春がきてほつとし、帰国の望みを持ち始めた。昭和二十一年の五月に、引揚げが開始された。兄が病氣になつていて動かすことができないので、その看病をしていたので、引揚げが一カ月延ばされて、胡蘆島から病院船で博多港に入港した。更に、博多港の検疫所で引っかけかり、療養のために、私が付き添つて仙台の陸軍病院に入院させられてしまった。しかし、ついに生きて故国の土を踏み、故郷にも帰り着くことができた。あの感激は、今に至るまで忘れることはできない思い出である。だが、私には帰る実家もなく、何とも惨めな思いの帰国でもあった。

帰国してからの生活

私は、白方村の婚家先に行った。そこで夫が無事に帰つてくることだけを頼りに生活することとした。まったく面識の無い人々の間に入つての肩身の狭い生活であった。

夫は、その年の十一月に元気で帰つてきた。やっと

夫婦の生活ができるようになって、猫の額のような畑で農作業をしたり、山に入って炭焼きの仕事をしたりしていた。村の世話で山の開墾が許可されたが、山奥の一軒家で生計を立てる元氣も自信もなく断った。

主人の両親は健在であったが、家は弟が継いでいて、私たち夫婦を受け入れる余地はなかった。春になり、私たちの仲人だった人から、峠の西側の村に老夫婦がいて養子になる人を探しているが、どうだとの話があった。

夫もその氣になって一緒に峠を越してその家に行つたところ、それこそ山奥のまた山奥で、小さな古ぼけた小屋に老夫婦が住んでいたが、その老夫婦はもう働く力もなく、畑は石ころだらけの二十坪ばかりで、他には土地も持っていなかった。何里も山道を下って行くと少々の畑や家もあるようだが、どうやって暮らすのかと思案したが、それでも雨露をしのげる家があるのが魅力であった。新京、奉天での避難生活から比べたら天国だと考え直し、養子に入ることとなった。山菜を採ったり、村の山仕事に雇われたりして細々と日

を送っていた。この養父母が亡くなった後は、どこかの町に出て夫婦して働いて暮らそうという夢を持って過ごしていた。その年は暮れたが、その一帯は恐ろしいくらいに雪が降るところで、雪の下に埋もれて熊のように冬眠するよりほかなかった。

そんな冬に、長女が生まれて我が家にも明るい希望のともしびがともった。

ようやく長い冬が去りウグイスの鳴く春を迎えて、生き返った。

再び開拓者として

妻の実家では、次々と満州から引き揚げてきて、岳山麓に開かれた県営の開拓地に入植していた。義兄が我が家に訪ねてきて、「こんな山奥で、しかも土地も持たずにどうして暮らすのか！ おれの方にこい」と入植することを誘った。私たち夫婦はその話を聞いて、何となく同意をしまい、年老いた養父母には氣の毒だったが別れを告げて、開拓地に入って一から出直しの生活を始めた。

この大玉村開拓地は、福島県庁の開拓課の指導で開かれた開拓地で、平和村と名付けられていた。各戸には五町歩の山林が割り当てられた。私は、早速に三坪ばかりの掘っ立て小屋を建て、屋根は笹でふいた。水は近くにわいている泉の水を飲んだ。土地を耕し甘藷を植えたが、最初の年は指先ほどの辛しかできず、大根や粟なども食料となるほどの収穫はなかった。不毛の火山砂地では、自活の夢は程遠いものであったが、みんなが我慢をして頑張っているので、辛抱するしかなかった。それでも満州時代よりは明るい日々であった。

多くの入植者は独身であったが、私たちは子連れだったので他の人の何倍も苦勞した。筆架山は、土地が肥沃であったので何でもよくできて、農作業も他人を見習いながらやっていたが、ここでは、頭を使い創意工夫と研究心を持っていなければならなかった。しかし、私は頭を使うのは苦手であったし、妻は農業を知らないので失敗ばかり重ねていた。県開拓課の指導は、五年間で三町六反（三六〇ヘクター

ル）の耕作をしなければ、五町歩全部を没収するといふ致命であった。とても大変なことである。その間には補助金や貸付金が出たが、とても生活は苦しかった。病気や災害があっても保護の対象とはならず、だれもが挫折感を余儀なくされた。

昭和二十八年は大冷害の年で、凶作となり開拓地の収穫は皆無となり、県も開拓行政を見直し、救済策を考え始めた。

こんな開拓地の状態において、思想的な問題も入ってきて、開拓地の住人というと、町や村の人々は敬遠するようになってきた。そのうちに、県の行政指導もだんだんと軌道に乗り、「成功（精穀）検査」という開拓者に対する検査も行われた。地権も確定したので入植者は安心して、農業以外に生活を支えるため出稼ぎに出たり、一部の土地を別荘地として売ったりして、生活も安定するようになってきた。

我が家も二男二女の子供を得たが、病気や障害などが次々とあって、子育ての難儀や教育費、生活費のやり繰りで大変だった。だが、満州時代、避難時代の、

あの苦しみに耐えて、こうやって生き延びてきた者にとって、あれ以下の生活は無い。あの苦しい生活を耐えたのだから、今のこの苦しさを生き抜けるといふ自信があった。

私たち夫婦にとつての前半の人生は、波瀾万丈で不幸な時代に生きていた。今の太平洋な世は、何か恐ろしいような気もするが、あの悲しみや苦しみや悔しさを二度と再び体験することのないように、幸せな、平和な生活を大切にしていかねばならない。

生き地獄体験記

群馬県 大野 しづ江

奉仕隊の生活あれこれ

一面に凍りついた北満大陸の冬。地下四メートルぐらの井戸は、中までも深く凍りついてしまうので水がくみ上げられずに、その都度氷を割らなければならず、水くみは大仕事でした。

くむときは、井戸のそばで火をたいて、「つるはし」で井戸の周りの氷を砕くことから始まるのです。「氷のくす玉」のようになっている「水汲籠」を火に近づけて氷を溶かし、そしてその籠に入って井戸の中に入りて行くのですから、体重の軽い人の仕事となります。

井戸の中はとても寒くて、今で言う冷蔵庫に入ったような有様です。何分も入っていられないので、すぐに上がり次の人が交代して、また、井戸の中に入り氷を砕くのです。井戸の中に入っている以外の人は、命綱を押さえたり巻き上げたりする仕事をしていました。

だんだんと氷が割れてくるに従って籠が下がって行くので、命綱の操作も必死でしたから、ほんとうに大変な仕事でした。

春になると農場に入植しましたが、私たちと一緒にいた満馬も、連絡用に、農耕用に、いろいろと働かされて大変でした。前の方が見えないほどに広く長い畑を黙々として行き来する満馬は、私たちと同じように